

生涯研修プログラム「症例から学ぶ」 IV. 産婦人科手術 3) 産科手術

帝王切開術

日本赤十字社医療センター部長 杉 本 充 弘

分娩は本来経腔的に行われるものであるが、経腔分娩を困難とする要因がある場合や経腔分娩の進行が母児の健康を害する危険がある場合に、産科医療の対応として帝王切開分娩(術)が行われる。帝王切開術は産科の基本手術の一つであり、日常臨床において頻繁に経験される開腹手術である。

しかし、希ではあるが麻酔のトラブル、多量出血、他臓器損傷、術後感染、肺血栓塞栓症、術後イレウスなどの問題を生じることがある。帝王切開術を行ううえで出血の制御や胎児の娩出など技術的に難しいハイリスク症例として、早産、前置胎盤、常位胎盤早期剝離、子宮筋腫合併、多胎妊娠、帝王切開既往などが挙げられる。緊急時にお

いても、症例のリスクに的確な対応をするためには、基本手術手技の習熟に加えて、リスクへの対応法を日頃から学習し念頭に入れておくことが肝要である。

さらに、自然分娩できなかったことが母親の心理的マイナスとなり、親子の絆(きずな)を形成するうえでハンディキャップとなる例もみられる。術前後の十分な説明と、自然分娩と同様に出生後の親子の早期接触に配慮することが必要である。

帝王切開分娩は自然経腔分娩が難しい母児に対する産科医療のサポートである。産科医には帝王切開術のリスクを回避して母児の安全を守るだけでなく、帝王切開を親と子が満足できる分娩として提供することが求められる。